

# 演歌について

田 口 親

夏の夜は、あつくてねむれない。ねむれないままに、妻の買  
 って来てくれた「思ひ出の歌集」を引っぱりだして、知ってい  
 る歌を唄っていると、目についた歌がある。それは、「ノルマ  
 ントン号沈没」の歌である。ひとつ皆さんに見ていただこう。

- 1 岸打つ波の音高く 夜半の嵐に夢さめて
- 2 青海原を眺めつゝ わがはらからは何處ぞと  
 呼べど叫べど聲は無く 尋ね搜せど影はなし  
 噂に聞けば過ぐる月 二十五人のはらからは
- 3 旅路を急ぐ一筋に 外國船と知りつゝも
- 4 航海術に名も高き イギリス船ときくからに  
 ついうかうかと乗せられて 浪路も遠き遠州の  
 七十五里も早や過ぎて 今は紀伊なる熊野浦
- 5 名も恐ろしき荒波に 乗り出でたるぞ運のつき  
 折しも雨は降りしきり 風さへ添へて凄じく
- 6 渦巻く波を巻きあげて 我を目<sup>め</sup>覓<sup>み</sup>けて寄せ来る  
 幽かに見えし燈臺の 光もいづしか消え失せて

- 7 あやめも分かぬ眞の闇 水先測る術もなく  
 乗合人も船人も 思案に暮るゝ瞬間に
- 8 岩よ岩よと呼ぶ聲の マストの上に聞ゆれば  
 あわやとばかり身をかわす いともあらで荒波に
- 9 打ち流されて衝突の 一聲ぼうと轟けば  
 流石に堅き英船も 堪へも果さで打ち破れ
- 10 逆巻く波は音高く 機關室へとほとばしり  
 凄き聲して溢れたり 斯くとも見るより同胞は
- 11 互ひに救ひ救はれて 皆もろともに立ち上り  
 八洲船の救ひをば 聲を限りにもとむれど
- 12 外國船のなさけなや 殘忍非道の船長は  
 名さへ卑怯の奴隸鬼は 人の哀れを外に見て
- 13 己が職務を打ち忘れ 早や臆病の逃げ支度  
 その同胞を引つれて パツテイラへと乗り移る
- 14 影を見送る同胞は 無念の涙やるせなく  
 溢るゝ涙を押し拭ひ ヤオレ憎き奴隸鬼よ

15 如何に人種は違ふとも 如何に情は知らぬとも  
 此の場に臨みて我々を 捨てゝ逃るゝは卑怯者  
 思ひ出せばその昔 俊寛僧都にあらねども  
 16 沖なる島に身を投じ 見るも憎しや情なや  
 彼は岩なり我は船 みすみす沈む海原の  
 17 底の藻屑となりゆくは いと易き事ながら  
 家に残れる妻や子や 待ちくたびれしはらからの  
 18 我なき後は如何にせん 歎きぞいとと思はるゝ  
 浮世は假とは云ひながら 常なきものは人心  
 19 昨日の恩は明日の仇 斯かる奴とは露しらず  
 その信義をば片頼み つかうかゝと大海に  
 20 乗り出でたるぞ恨めしや よしや恨みは残すとも  
 汝がなせる罪惡は 此の世のあらん限りには  
 21 などて晴らさで置くべきか 右手に幼兒左手には  
 老いたる者を助けつゝ 悲歎に沈む涙淵  
 22 伏しつまるびつ泣き入りて 目もあてられぬ風情なり  
 折しも一人の少年は 甲板上によじ上り  
 23 沖なる方を打ち見やり せき來る涙とゞまらず  
 我れ航海の一端も 學び覚えし事あれば  
 24 日頃の技倆をあらはして 遁るゝ術は易けれど  
 我が同胞の危難をば 捨てゝ救はでたゞ一人  
 25 命を惜むたはけ者 大和心のますらをに  
 嘲り笑はる苦しさよ いざこれよりは潔よく

27 皆もろともに此の身をば 千尋の海に打ち沈め  
 藻屑とこそは果てなんと 呼ばゝり終るその中に  
 無情を告げる時の鐘 山なす波に打ちまかせ  
 28 二十五人の兄弟は 無慘や藻屑となりにける  
 斯くと知らずや白波を 舟に乗じて船長は  
 29 紀伊の濱邊に上陸し 領事廳へと進み出で  
 己が過失を掩はんと 非を理にまぐる陳述を  
 30 晋に名高きホント氏が 何とて知らざる事やある  
 固より知りつる事ながら 我が東洋に人なしと  
 31 日頃の傲慢あらはして 大惡無道の奴隸鬼を  
 無罪放免それのみか あつぱれ見事の船長と  
 32 譽めはやしたる裁判を 聞いて驚く同胞は  
 切齒扼腕やるせなく 輿論一時に沸騰す  
 33 正は正なり非は非なり 國に東西ありとても  
 道理に二つあるべきか ノルマントンの船長の  
 34 その暴惡の振舞は とつ國々の人ですら  
 その非を責ぬ者ぞ無き 乗合多きその中に  
 35 白哲人種はみな生きて 黃色人種はみな溺る  
 原因あらば聞かまほし 彼も人なり我も人  
 36 同じ人とは生れながら 危難を好む人やある  
 命惜まぬ者やある イギリス國の法官よ  
 37 汝の國の奴隸鬼は 人を殺して身を遁る  
 義務を忘れて法犯す 兇惡無道の曲者ぞ

38 是ぞ所謂スローター ナドテ刑罰加へざる  
 ナドテ刑罰加へざる 汝が國は兵強く  
 39 軍艦大砲ありとても 我が國民は智識なく  
 國はまことに弱くとも 鳥や豚ではあるべきか  
 40 是非曲直を知る者を 大和魂ある者を  
 二千餘年がその間 尙武の國と名も高く  
 41 外國人の侮りを 受けしことさへ無きものを  
 斯くする法の傲慢の その裁判におめおめと  
 42 従ふ奴隸があるべきか 汝知らずや我が民は  
 恥のために生命も 義理にのぞめば財産も  
 43 捨てゝ惜まぬことわりは 破船の時の少年の  
 舉動を見るさへ知りつらん 我がはらからはふだんにも  
 44 無慘の横死と聞くならば 雲井に翔る都人も  
 伏屋に宿る賤の女も 六十餘州はみな同じ  
 45 己が困苦を打ち忘れ その兄弟は妻子まで  
 救はでやまぬ鐵石の 心は同じ敷島の  
 46 大和心のますらをを 道理づめなる論鋒や  
 その豪氣なる振舞は 岩をも碎く勢ひに  
 47 流石に名高い英人も 傲慢心も打ち破れ  
 一旦免ぜし奴隸鬼を 一言いはさず引捕へ  
 48 再び開く公判に 罪科の處置を定むれば  
 二十五人の家族等も 三千餘萬の同胞も  
 49 その公平に感嘆し 積る怨みもこれに晴れ

演歌について

50 波風にはかに鎮まりて 残るは元の月一つ  
 いとあざやかに見えにける 是を見るにも思ひやる  
 今ほ明治の御治世 外交頓に繁くなり  
 51 國事も日々に多端なり 遙に彼方を見渡せば  
 筑紫の海は波高く 風さへ強き秋の空  
 52 薩摩の海の南には 豺狼の棲む國もあり  
 用意もなくてうか／＼と 吹き流されて破船せば  
 53 二十五人はまだ愚か 三千萬のはらからも  
 あはれ危難に過るにも まして條約改正の  
 54 今にも談判整はば 内地雜居となり來り  
 赤髮碧眼數多く 我が國內に乗り込みて  
 55 學問智識を競争し 工藝技術それぞれに  
 名譽の淵に乗り出し 勝負を競ふことなれば  
 56 油斷のならぬ今の時 ノルマンントンの沈没の  
 その慘狀を知る者は 心根たしかに氣を張りて  
 57 もしも第二の奴隸鬼や なほ恐ろしきフアントムが  
 現れ出でた事ならば 三千餘萬のはらからは  
 58 みな諸共に一致して 力を限り精限り  
 縱横無盡に奮戦し それでも及ばぬその時は  
 59 生命財産抛ちて 國の權利を保證して  
 保たにやならぬ國の名を 保たにやならぬ國の名を  
 だいぶ長いがこういう歌である。知っている方もまだかなり  
 おられることだろう。ノルマンントン号沈没の事件に関しては、



高田早苗・大谷木備一郎・福地源一郎演述『ノルマントン号事件日本大勝利』(筆記兼出版人木村莊二郎・晩青堂・明治19・12刊)、下司盛吉著『英船ノルマントン号遭難詳説』(顔玉堂・明治19・12刊)、『絵入扶桑新誌』二九六一号の附録「ノルマントン号裁判傍聴記」がある。このほかにも、私は見ていないが井上清著『条約改正(―明治の民族問題―)』(岩波新書・昭和30・5刊)のなかに、この歌をのせ、

「事件直後に『英船ノルマントン号沈没事件審判始末』が出版され、翌年早々にも『英國汽船諾頓號裁判記録』が出版された」(四〇頁とある。

この事件は、明治時代における大きな事件の一つであって、錦絵になって残されているほどである。

明治十九年十月二十四日午後七時頃、和歌山県潮ノ岬の暗礁に乗り上げたイギリス船ノルマントン号が沈没して、二十五人の日本人が溺死したが、船長ドレイクは、端舟で逃げ帰り、神戸イギリス領事館で、日本人は英語がわからず、早くボートに乗り移ることをすすめたが応じなかったといひ、領事は、海事裁判で、船長はよくその職責を果たしたとし、無罪とした。これに対して、日本の国民は黙ってはいられなかった。この歌はその国民的盛り上りをはっきりと見せているが、その結果は十二月八日に船長ドレイクを懲役三カ月に処すとの判決が下されただけで、死者に対しては何らの処置もとられなかった。前にあげた資料でみると印度人も死んでいる。要するに、白人だ

けが生きのこったのだから、問題が大きくなったのであろう。歌のなかの奴隸鬼は船長の名前をモジったものであることは、いうまでもない。こういうふうには、流行歌などとは簡単に捨てないでよくみると、なかなかどうして、その時代の風潮をよくうつしているものなのである。例の川上音次郎がはやらしたという「オッベケベ」でも、

亭主の職業は知らないが 娘は當世の束髪で

言葉は開化の漢語にて 晦日の斷り洋犬抱いて

不似合だおよしなさい 何にも知らずに知つた顔

むやみに西洋を鼻にかけ 日本酒などは飲まれない

ビールにブランド ペルモット 腹に馴れない洋食を

やたらに食ふのは負け惜しみ 内證でそつとへどはいて

まじめな顔してコーヒ飲む おかしいねおつべけべ

おべけべつぽ べつぽつぽ

このくらい、その頃の風俗を簡単に伝えて妙あるものはちよつとなひではあるまいかと思うがどうであらうか。じつは、これからのそうとする「演歌について」に私が手をだしたのは、まだ一、二年くらい前のことで、それは次のようなことからそうなのである。先年、この世を去つた池田政敏君という仁がこの図書館にいて、私と二人で視聴覚資料を集めることになったが、池田君の友人、塩田英五郎君と私たちの間に、「演歌」というものがなくなろうとしている、これを何とか保存したいものだという話が持ち上つた。そして三人で力を合わせて

ひとつこの保存を試みようということになり、その仕事にとりかかったのであるが、残念なことに池田君はその仕事に足を踏みこむ前に死去されてしまった。池田君は音楽史的に「演歌」を見て行こうとする立場をとり、私たちもその方向に仕事を進めて行こうとしていた矢先であつたので、彼の死は少なからぬつまづきとなつた。が、せめて録音をとるところまでやらなければという塩田君の言にはげまされて、私は演歌という全然未知の世界へとびだして行つたのである。私たちは演歌をまず社会風俗史的に見て行こうということにして、代表的な作品を、そのふんいきをもあわせて録音した。これらのことが何か一つの責任のようなものになつて、あとで私におそいかかつてようとは少しも思わなかつたものである。しかし仕方がない。先輩の言によると、図書館員たるものはひと通り何でも手がけなければ、一人前には、なれないそうである。

それではまず、「演歌」の名称から書きだしてみよう。

添田知道著『添田啞蟬坊・流行歌明治大正史』（春秋社・昭和8・11刊）によれば、

「流行歌の読売をする事を、その仲間では『演歌』と称し、その業者を演歌屋と称する。これは壮士節発生当初に於ける読売唄本が、『自由演歌』と題したことに起因する。そして演歌とは、歌を演ずるといふ程の意味である。」（三八八頁）とある。因みに、本書は、添田氏が『改造』の大正一四年・六・七月号に「演歌流行史」と題して書いたものを一本

## 演歌について

にまとめたものである。

また、絲屋寿雄著『流行歌』（三一書房昭和32・6刊）の三〇頁と、同氏「自由演歌の時代（一）」（河出書房『歴史評論』八一号・昭和31・11月号）の八六頁には、

「演説を歌でやるから『演歌』という語が生れた。新聞の演説のような文句に節をつけて、さかんに藩閥攻撃をする——それは野党精神のかたまりであり、政府の言論抑圧にたいする民間壮士の抵抗であつた。演歌は、幕末の瓦版・読売の形式を踏襲したものであつた。」とのべられている。

さらに、添田知道著『流行り唄五十年（一啞蟬坊は歌う）』（朝日文化手帖・朝日新聞社・昭和30・12刊）には、

「演歌とは、演説の代りに、それを歌でやるところから、『説』を『歌』とおきかえた新造語だつた。」（二七頁）と見えている。「演歌」は、演説を歌にして聴衆に聞かせたものであるが、ではなぜ演説を歌にしなければならないのかというと、自由民権運動に対する政府の弾圧が、演説を歌にするように強いたのだということもできよう。坂本太郎監修・森末義彰・日野西資孝編『風俗辞典』（東京堂・昭和32・11刊）の艶歌の項には、つぎのようにのべられている。

「明治十五年（一八八二）ごろに起つた自由民権運動の自由党の壮士らが、警官と衝突検束騒ぎを起しながら彼らの思想を歌に託して演じた演歌立読から起つたもので、その歌を『壮士節』といい、彼らを『読売壮士』といった。明治



十九・二十年頃流行した『ダイナマイト節』や、二十三・四年の、壮士芝居で川上音二郎が流行させた『オッペケベ一節』はよくその面影を伝えている。明治二十六年ごろ街頭芸人で月琴・胡弓を伴奏とした法界屋の『ホーカイ節』が流行し、読売壮士はこれを嫌ったが圧倒されて、演歌は次第に軟弱化した。日清戦争ごろには『欣舞節』が流行し、三十三年の北清事変以後、壮士に対する政府の圧迫が激しくなり、演歌師の本部青年倶楽部が翌年解散し、演歌師はちりぢりになったが、当時の世相は『愉快節』や『ストライキ節』に反映している。ついで日露開戦時には、添田啞蟬坊の『ラッパ節』が流行した。演歌になくはならぬヴァイオリンの伴奏が始まったのは明治四十年ごろで、それとともに、演歌師も職業化して、名称も艶歌師と改まった。その代表者が神長瞭月で『残月一声』『夜半の追憶』などに始まる。明治最後の年は『紫節』（チョイトネ）が大流行した。大正三年（一九一四）神長は『松の声』をニッポノホンレコードに吹込んだとき、初めて『流行歌』の名称を用いた。——（郡司）」（六七頁）

以上で演歌なるものの大体はわかるわけだが、辞典ではこのほかに、河竹繁俊監修・早稲田大学演劇博物館編『芸能辞典』（東京堂・昭和28・3刊）の八一頁に演歌師の項がある。さらに詳しいものを見たいとなると、「演歌の名称」のところすでにあげた三冊のほかに、藤沢衛彦著『明治流行歌史』（春陽

堂・昭和4・1刊）、同氏著『流行歌百年史』（第一出版社・昭和26・10）、高橋翔太郎著『流行歌三代物語』（学風書院・昭和31・8刊）、園部三郎著『演歌からジャズへの日本史』（現代叢書・和光社・昭和29・9刊）今西吉雄著『今昔流行歌物語』（東光書院・昭和9・7刊）等々がある。伝記として書かれたものには、添田啞蟬坊著『啞蟬坊流生記』（那古野書房・昭和16・3刊）同氏著『啞蟬坊顕彰会・昭和31・11刊』があり、音楽史の本としては、遠藤宏著『明治音楽史考』有明堂昭和23・4刊）、堀内敬三著『音楽五十年史』（鱗書房・昭和17・12刊）園部三郎著『音楽五十年』（二十世紀日本文明史・時事通信社・昭和25・1刊）などがある。なお、概論風のものでは、『明治文化史』第一卷（洋々社刊）の「概論編」第七章の(6)（六五四―六五六頁と、第九卷「音楽・演劇編」第七章（六三二―六三三頁と）がある。流行歌・俗謡に目をつけた幕末明治史には、櫻木章著『側面観幕末史』（啓成社・明治38・9刊）があり、明治の風俗史としては、藤沢衛彦著『明治風俗史』（春陽堂・昭和4・5刊）、これを二冊にした三笠書房の『現代叢書』（昭和16・12、昭和17・9刊）がある。そのほか楽譜となると、これはいろいろあるが、珍らしいものとしては、永井岩井撰曲・小島八郎調曲『西洋楽譜日本俗曲集』（明治24・12刊、昭和25・10刊）の二冊がある。さて、つぎにちよつと変ったものを書いてみると『浅草の灯』で有名になった浜本浩氏が、『新潮』の昭和二年一月特大号に、「情熱の人々」の三篇として、民権媼さん楠瀬喜

多という人のことを小説化している。このことは、柳田泉著『続随筆明治文学』（春秋社昭和13・8刊）所載の「自由民権意識に成る詩歌」（四八頁）でもとりあげているが、これは小説化する前に、『愛書趣味』（四ノ二）に浜本氏が、「民権教え歌」として、昭和四年三月にのせられたものの抜き書きである。また笹川種郎・白河次郎編『嶺雪文集』（玄黄社・大正2・6刊）

の二〇六頁に、「壮士歌」（明治28・4稿）というのがある。浜本・田岡氏ともに演歌師の風貌を伝えてくれている。柳田泉氏のものは、自由民権思想の詩歌にあらわれたものをとりあげたもので、なかなか細かいものである。このほかに雑誌にのっている「演歌」のものとして、糸屋寿雄氏の「自由演歌の時代」（一）（『歴史評論』八一・八二号、昭和11・12月号）があり

これをまとめたものが、さきへのべた『流行歌』である。また、塩田英五郎氏の「演歌の時代」（『歴史評論』八六号・昭和32・7月号）、同氏「演歌ききがき」（『日本歴史』八五号昭和30・6月号）がある。この「演歌ききがき」は、東富士郎氏からのききがきで、演歌師の生活が記されていてなかなかよい資料になると思われる。以上ざっと明治に端を発した「演歌」についての資料を記してみた。



おッペけべー歌入雙六（早稲田大学演劇博物館蔵）70.5cm×49.5cm